

一研究者としてのひとり言

上村 大輔

神奈川大学 理学部 教授

最近10月になると、やたらそわそわする。私達にとってノーベル週間がそれほど遠いものではなくなったのである。ある時期、11年間に6人の日本人がノーベル化学賞を受賞し、加えてノーベル物理学賞の受賞も重なった。いったいどうした事であろうか。優秀な人材が科学の世界に飛び込み、日々努力していた結果であることは当然であるが、他にも幾つかの理由が見えて来る。少し私なりに考えてみたい。

昭和40年ごろ高度成長に日本中が沸き返り、社会全体は世界の中心での活躍に向けて大きく舵取りを進めることになっていった。多くの若者は、世界の動向をより知ろうと、少しでも多くの知識を持った人をもとめていたし、出会いに喚起されて実際に世界に飛び出し、さらに情報量、研究力を深め、世界を思い切り取り込もうとした。日本の頭脳流出と言われたのもこの時代であった。

一方、国内に残った若者も、ただ手をこまねいていたわけではない。黙々と力をつけた者もいた。京都、大阪での講演会や、研究室勉強会に参加し、お互いに力をつけていたのである。社会的な封鎖感、保守的な傾向に対して、許された状況の中で頑張った人たちもいたが、反発して研究室を変え国内の地方へと散っていった人たちも数多かった。じっと待ってはおれなかったし、上述の留学を含めて自発的に行動を起こしたのである。個性と自己主張を大切にしつつ初志貫徹を図ったといえる。ある人は政治的な活動や、また大学の閉塞感から脱出して、地方で自由を獲得したことになる。地方で若

い人材が目立ち始めた時期でもあった。輝き解き放たれた駿馬を予感した。ただし、国内の研究費は未だ十分ではなく、そもそも制度設計のうえで、どういった研究資金の配分が適切かと試行錯誤がなされている段階であった。アメリカからの研究費援助を受けていた国内研究室もちらほらあった。一方、世界へ飛び出た人たちは、財政的な辛苦から解き放たれ、全力で研究に没頭できた。しかし、研究費申請など、国外でも大変であった事は後から分かってきた。

こういった状況の中で、研究分野を問わず広く研究費を配分するという日本独特の、素晴らしい環境が出来ていった。これが科学研究費の誕生であり、広く薄いが新鮮味のあるボーナス的な意味を持った研究費で、胸躍るものであった。定年までに一度は一般研究Aを獲得できないかと思った時代でもある。大きな有名研究室でなければ採択されない、厳しい研究費と認識されていた。若い研究者には一般研究B、Cに加えて、特定研究、がん特別研究などもあり、各分野も潤ったし、人的交流も深まった。この時代の研究費が血となり肉となって、若い研究者の足腰を丈夫にしたことは、皆さんの認識されている通りである。冒頭で述べた日本人研究者のノーベル賞受賞に繋がったことも事実であろう。科学研究費の枠組み構築に関与された先輩諸氏に心より御礼したいと考える昨今である。

今日を見てみると、応用的な方面や一部若手の補助など限られた研究者に対する特別大型な予算が増えている。これはそれで良いのだが、研究者の層



の厚さについて今少し配慮されるべきであろう。アメリカのオバマ大統領は日本の産業界の強さに感服して国立高等専門学校機構の視察を行うように命じたと聞く。これも我が国の強みが、研究者の層の厚さ、技術力の確かさにあることを知ってのことだろう。層の厚さを支える科学研究費と、選抜的な大型予算は異なるもので、同じ審査システムで科学研究費が配分されてはならないことを強調したい。

誠心誠意、それぞれの分野の世界最先端で研究を推進する限り、無駄な研究などはないのである。個性と自己主張を大切に、宇宙環境での新材料生産研究や新分子科学なども含めて、新しい未開拓分野に挑戦しようではないか。

うえむら・だいすけ

1973年名古屋大学理学部助手、1979年静岡大学教養部助教授、1991年教授、1995年同理学部教授、その間、ハーバード大学客員研究員（1982年6月～9月）、(財)相模中央化学研究所研究顧問（1991年～2000年）。1997年名古屋大学大学院理学研究科教授、2008年慶應義塾大学理工学部教授、2011年神奈川大学理学部化学科教授、現在に至る。1977年日本化学会進歩賞、2006年日本化学会学会賞、2007年中日文化賞、2009年内藤記念科学振興賞、2009年紫綬褒章、2012年ナカニシプライズを受賞。